短 報

スピーチ予期時の話者の否定的感情¹

—賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と聴衆の存在から—

吉澤英里 環太平洋大学次世代教育学部²Speaker's motivational states and presence of an audience
on negative affect before make a speechEri Yoshizawa (*Faculty of Education for Future Generations, International Pacific University*)

Effects of speakers' interpersonal needs (i.e. praise seeking and rejection avoidance needs) and the presence of an audience on negative feelings experienced in speech situations were investigated. First, participants responded to scales assessing praise seeking and rejection avoidance needs. Then, they made a speech for 3-4 minutes in a room with an audience, or without. Negative feelings before and after the speech were assessed. The results indicated that negative feelings of all the speakers were strongest when anticipating making a speech. Moreover, negative feelings were stronger when making a speech in front of an audience, than when making a speech without an audience. Furthermore, speakers with high rejection avoidance needs and low praise seeking needs had stronger negative feelings than those with low rejection avoidance needs. On the other hand, there was no correlation between speakers' interpersonal needs and the presence of an audience, which affected the negative feelings of speakers.

Key words: speech, negative affect, praise seeking needs, rejection avoidance needs, audience

これまでに、個人の生理心理的变化を測定するためのストレス課題としてスピーチが用いられてきた。スピーチによって話者が心拍数やストレス、あるいは不安感や緊張の高まりのような生理心理的变化であるネガティブな経験をすることが知られており、この現象を説明するために様々な研究がなされてきた。例えば聴衆に関わる要因として、聴衆がいないよりもいる前でネガティブな経験をする傾向があること (Bosch, De Geus, Carroll, Goedhart, Anane, Zanten, Helmerhorst, & Edwards, 2009; Oda & Endo, 2008)、あるいは聴衆の人数が多いほど話者はネガティブな経験をする傾向があること (Sawyer & Behnke, 2002) などが明らかになっている。しかし、実際の聴衆がいない場面でもTVモニタのように話者が聴衆を見える

状態にしたり、ビデオカメラで話者の様子を録画したりすることで、話者がスピーチによるネガティブな経験をすることも示されている (Jeger & Goldfried, 1976; 手塚・敦賀・村瀬・鈴木, 2007)。そこで本研究では特に話者の心理的变化を扱い、実際の聴衆がいない場面でも話者がネガティブな感情を経験する要因を検討する。その要因として、話者本人の対人的欲求の影響について論じる。

スピーチ場面の話者の生理心理的变化に関わる話者本人の要因として最も多く報告されているのは対人不安 (Social anxiety) であり、その一つと考えられているものに、予想されるか現実に行われるスピーチに対して緊張したりあがったりするスピーチ不安がある (Leary & Kowalski, 1997)。これまでに、対人不安やスピーチ不安が高い話者は聴衆の前でスピーチを行ったりスピーチ場面をイメージしたりすることによってネガティブな経験をすることが示されている (Puigcerver, Martinez-Selva, Garcia-Sachez, & Gomez-Amor, 1989; McKinney, Gatchel, & Paulus, 1983; 小泉, 1997)。有光 (2001) によると、スピーチ場面で“あ

Correspondence concerning this article should be sent to: Eri Yoshizawa, 721 Kan'onji, Seto-cho, Higashi-ku, Okayama 709-0863, Japan (e-mail: e.yoshizawa@ipu-japan.ac.jp)

1 本研究の一部は日本心理学会第76回大会 (2012, 専修大学) にて発表された。

2 研究時所属: 青山学院大学教育人間科学部

がり”として感じる生理心理的变化は社会的評価場面として他者を意識することに由来する。さらに、対人不安を高める要因として他者からの否定的な評価への恐れがあることが示されている（石川・佐々木・福井, 1992; Mansell, Clark, Ehlers, & Chen, 1999; Winton, Clark, & Edelmann, 1995）。菅原（1986, 1998）は他者からの評価に対する動機には“拒否されたくない欲求”と“賞賛されたい欲求”があるとし、“拒否回避欲求”と“賞賛獲得欲求”と称した。拒否回避欲求が高い個人の特徵として他者から拒否されることに強い警戒感を持ち他者の言動に注意することがあり、公的自意識との関連が指摘されている（菅原, 1986）。つまり、拒否回避欲求の高い話者がスピーチを行ったりスピーチ場면을予期したりすることによって特にネガティブな経験をするのは、聴衆という他者からの評価にさらされるためだと考えられる。吉澤（2013）は、聴衆がいけないスピーチ場면을予期した時に拒否回避欲求の高い話者は低い話者よりも否定的感情が高いことを示した。この理由として、拒否回避欲求の高い話者は他者の否定的評価に対して過敏であるため実在する聴衆がいなくてもビデオカメラを“見えない他者”として意識してしまい否定的感情が生じた可能性を挙げている。一方、賞賛獲得欲求は検討されていないため、拒否回避欲求だけでなく賞賛獲得欲求を含めて議論をする必要がある。

個人の対人的欲求について、Schlenker & Leary（1982）の対人不安の自己呈示モデルでは、他者に特定の印象をつけたいという自己呈示の動機づけが高いが、それが成功するか疑わしい時に対人不安が生起する。つまり、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求がいずれも高い話者が最も対人不安が高まると言える。しかし、菅原（1998）は対人不安傾向について賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との関連を検討した結果、拒否回避欲求のみが対人不安傾向と関連することを示した。佐々木・菅原・丹野（2001）は賞賛獲得欲求が低く拒否回避欲求が高い個人はそれ以外に比べて対人不安が高いことを示した。そして、対人不安とは基本的に他者からの否定的評価に対する不安感であり、拒否回避欲求が低い場合は対人不安が高まらないため賞賛獲得欲求の高低は影響しないが、拒否回避欲求が高い場合は賞賛獲得欲求が対人不安に対して抑制的に影響すると述べた。その他の対人不安と両欲求との関連を検討した研究でも拒否回避欲求と対人不安との間には関連が認められるが（笹川・猪口, 2012）、賞賛獲得欲求と対人不安との関連については一致した知見が得られていない。その理由として、他者の視線を意識する程度が考えられる。賞賛獲得欲求も公的自意識との関連が指摘されており、賞賛獲得欲求の高い個人の特徵として積極的に行動し他者の注目を集めたり、自己顕示的なイメージを他者に与えたいと思っていることな

どが示されている（小西・大川・橋本, 2006; 菅原, 1986）。つまり、他者から注目され積極的に賞賛されたいという欲求であるため、他者の視線を強く意識した時のみ対人不安が高まると推測される。

これまでの対人不安と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連は質問紙による検討が行われており、実際の対人場面を用いたものではなかった。そのため先行研究では他者の視線への意識に対する操作が不十分であった可能性がある。

そこで、本研究では対人場面の一つであるスピーチを扱い、なぜ聴衆がいけない場面がネガティブな経験をするのかを検討する。特に対人不安の先行研究に基づいて賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の影響を論じる。これまで対人不安と両欲求との関連については質問紙による主観的な指標を用いた検討が行われていたため、本研究でもネガティブな経験を測定するための指標として否定的感情を用いる。仮説は下記の通りである。(a) Schlenker & Leary（1982）のモデルから、聴衆がいる場面でのスピーチを予期した時、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求のいずれもが高い話者の否定的感情が最も高く、次いで賞賛獲得欲求か拒否回避欲求のいずれかが高い話者の否定的感情が高く、両欲求の低い話者の否定的感情が最も低い。(b) 聴衆のいない場面でのスピーチを予期した時、賞賛獲得欲求の高低は話者の否定的感情に影響せず、拒否回避欲求の高い話者の否定的感情が低い話者よりも高い。

なお、話者と聴衆の親密度についてスピーチ時の経験との関連を検討した研究はないが、日本人は心理的距離が中程度の相手に対して最も羞恥心が高まるという指摘があるため（佐々木・菅原・丹野, 2005）、本研究では週に数回ほど顔を合わせるクラスメイトに向かってスピーチをさせる。

方 法

実験参加者

首都圏にある私立大学の大学生337名（男性64名、女性273名）であり、平均年齢は19.66歳（ $SD=1.80$ ）であった。実験参加者はそれぞれ12～18名のグループで参加した。各グループの人数は、12名が6グループ、13名が7グループ、14名が3グループ、15名～18名が各2グループあった。

装 置

スピーチ中の話者の様子を撮影するためにビデオカメラ（SONY製 DCR-HC90）を使用した。

質問紙

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原, 2003）と一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴

木, 2000) を用いた。本研究ではネガティブな感情を扱うため、一般感情尺度の下位因子のうち否定的感情の得点のみを分析対象とした。

賞賛獲得・拒否回避欲求尺度 “賞賛獲得欲求”と“拒否回避欲求”の2因子18項目から構成されている。実験参加者には18項目をランダムに提示し、普段の状態について各項目に対して“あてはまらない (0)”から“あてはまる (4)”の5件法により回答を求めた。

一般感情尺度 “肯定的感情 (PA)”, “否定的感情 (NA)” および “安静状態 (CA)” の3因子24項目から構成されている。実験参加者には24項目をランダムに提示し、現在感じている状態について各項目に対して“全く感じていない (0)”から“非常に感じている (3)”の4件法により回答を求めた。

手続き

実験は“心理学実験”の講義で実習の一環として集団で実施した。実験を実施する前に、実験の目的を“スピーチを実施することによる話者の心理的变化について検討すること”と説明した。さらに、データは統計的に処理されることと、データ提供の是非やスピーチの結果は講義の成績には関係しないことを口頭と文章にて説明し、データ提供に同意する場合のみ同意書にサインをするよう依頼した。

はじめに、実験参加者全員に賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度と第1回目の一般感情尺度への記入を求めた。スピーチを聴衆の前で行う“聴衆有群”と無人の部屋で行う“聴衆無群”の二つのスピーチ群へ実験参加者の人数が均等になるよう、くじ引きで一つのグループあたり4名～6名ずつランダムに割り当てた。“聴衆有群”と“聴衆無群”に割り当てられなかった残りの4名～6名は聴衆役となった。くじは名刺大の無地のカードに“聴衆有群”“聴衆無群”“聴衆”のいずれかの文字と1～6までの数字が書かれており、裏返した状態で実験参加者にそれぞれ引かせた。くじ引き後に実験参加者にはそれぞれ次の教示を行った。聴衆有群には“これからこの部屋で順番にグループの人に向かって自己紹介を行います。ビデオカメラの前に立って3～4分間自己紹介をしてください。テーマは“私の長所”です。始めに“私の長所は…です”と言ってから話し始めて下さい”と教示した。聴衆無群には“これから順番に別室で自己紹介を行います。ビデオカメラの前に立って3～4分間自己紹介をしてください。テーマは“私の長所”です。始めに“私の長所は…です”と言ってから話し始めて下さい”と教示した。いずれの群もスピーチ時間の測定にはストップウォッチを使用し、実験参加者が操作した。また、いずれの群に対してもスピーチ時は床に貼られた目印の所に立ち、スピーチ中はメモなどを見ずに話すよう教示した。スピーチ群に割り当てられたすべての実験参

加者は自分がスピーチをする時以外は聴衆役として聴衆有群の実験参加者のスピーチを聴取した。いずれのスピーチ群にも割り当てられなかった聴衆役の実験参加者には、質問紙への記入はスピーチ群と同じタイミングで行うことを伝え、“これから、グループの人がスピーチを行いますので、静かに聴いてください”と教示した。スピーチおよびデータ測定はくじに書かれていた数字の順番で行った。以上の教示はすべて聴衆有群がスピーチを行う部屋で行われ、実験参加者全員がすべての教示内容を聞いた。上記の教示後、聴衆無群の実験参加者は実験者とスピーチを行う部屋へ移動し中の様子を観察した。聴衆無群が元の部屋に戻った後、約5分間スピーチの内容を考える時間を設けた。聴衆有群と聴衆無群へ割り当てられた実験参加者は、聴衆有群がスピーチを行う部屋で、スピーチを行う直前に第2回目の一般感情尺度への記入を行った。聴衆有群はそのまま聴衆役と向かい合うようにして約1.5メートル離れた所に立ってスピーチを行った。聴衆無群は別室へ移動しスピーチを行った。スピーチ時の実験参加者の様子はすべて約1.5メートル離れた正面からビデオカメラで撮影し、実験参加者には“両群とも一定の音量でスピーチしたかと3～4分間スピーチを継続したかを実験者が確認するため、ビデオカメラによる録画を行います”と教示した。スピーチ終了後、すぐに第3回目の一般感情尺度への記入を行った。聴衆無群に割り当てられた実験参加者はスピーチ終了後に元の部屋へ戻ってから質問紙への記入を行った。聴衆役は聴衆有群がスピーチを行う部屋でスピーチ群と同様のタイミングでデータ測定を行ったが、本研究では分析の対象としなかった。実験者である教員1名は実験中は聴衆有群がスピーチを行う部屋にいた。実験者からのフィードバックによる影響を避けるため、スピーチ中は反応をしないようにした。すべてのスピーチとデータ測定が終了した後、実験参加者全員に対して実験の目的と方法についてディブリーフィングを行った。

本研究は青山学院大学教育人間科学部研究倫理審査委員会の審査を受けて承認された (No. 2013-1)。

結果

同意書にサインをした実験参加者のうち、質問紙への記入漏れなどの不備がなく、聴衆有群と聴衆無群に割り当てられた者は216名であった。小島他 (2003) より、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の得点には性差があるため、得られたデータから男女それぞれの平均値と標準偏差を算出して、賞賛獲得欲求 (男性: $M=1.71$, $SD=0.76$, 女性: $M=1.89$, $SD=0.65$) と拒否回避欲求 (男性: $M=2.13$, $SD=0.93$, 女性: $M=2.65$, $SD=0.73$) に基づきZ得点を算出した。そして、各欲求のZ得点が0.5以上を高群、-0.5以下を低群とした。そ

Table 1
欲求群×スピーチ群の人数，賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の平均値および標準偏差

	N		賞賛獲得欲求		拒否回避欲求		否定的感情 (実験前)		否定的感情 (スピーチ直後)		否定的感情 (スピーチ直前)	
	男性	女性	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
聴衆有群												
HH群	3	16	2.60	0.38	3.35	0.28	0.89	0.76	2.20	0.57	1.45	0.91
HL群	1	6	2.52	0.22	1.90	0.28	0.77	0.58	2.07	0.60	1.00	0.18
LH群	1	5	0.80	0.39	3.20	0.08	1.19	0.64	2.35	0.40	1.50	0.90
LL群	6	10	0.99	0.28	1.48	0.34	0.57	0.60	1.65	0.73	1.07	0.87
聴衆無群												
HH群	2	12	2.44	0.19	3.28	0.29	0.66	0.55	1.71	0.72	0.83	0.57
HL群	1	7	2.51	0.23	1.85	0.40	0.39	0.45	1.09	0.91	0.77	0.49
LH群	1	9	1.06	0.34	3.30	0.20	1.25	0.82	2.35	0.38	0.74	0.75
LL群	1	11	1.15	0.35	1.47	0.66	0.88	0.66	1.32	0.79	0.43	0.31

注：HH群は「賞賛獲得欲求高群・拒否回避欲求高群」を，HL群は「賞賛獲得欲求高群・拒否回避欲求低群」を，LH群は「賞賛獲得欲求低群・拒否回避欲求高群」を，LL群は「賞賛獲得欲求低群・拒否回避欲求低群」をそれぞれ表す。

Figure 1. 測定時期および欲求群による否定的感情の平均得点の推移

の結果，賞賛獲得欲求高群・拒否回避欲求高群（HH群）が33名，賞賛獲得欲求高群・拒否回避欲求低群（HL群）が15名，賞賛獲得欲求低群・拒否回避欲求高群（LH群）が16名，賞賛獲得欲求低群・拒否回避欲求低群（LL群）が28名であった。本研究の最終的な分析対象92名について，賞賛獲得欲求および拒否回避欲求の群とスピーチ群の各性別の人数，賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の平均値および標準偏差，さらに

個人のNA（8項目）の平均値を得点として，スピーチ群ごとに各欲求群と各測定時期のNAの平均得点および標準偏差をTable 1に示す。Figure 1にはスピーチ群ごとに各欲求群と各測定時期のNAの平均得点を示す。

はじめに，スピーチの順番や聴衆の規模が否定的感情に影響を与えたかを検討するため，聴衆有群は“発表の順番”と“聴衆の人数”，聴衆無群は“発表の順番”を共変量として，NAに対して測定時期（実験前・スピーチ予期時・スピーチ直後）の共分散分析を行った。共変量の独立性，回帰直線の並行性および有意性を調べたところ，すべての測定時期においていずれの共変量についても回帰直線の有意性が見られなかった（それぞれ $\beta=0.03-0.11$ ，すべて $n.s.$ ）。そこで，以降の分析では“発表の順番”と“聴衆の人数”を対象としなかった。

NAに対して欲求群（HH群・HL群・LH群・LL群）×スピーチ群（聴衆有群・聴衆無群）×測定時期（実験前・スピーチ予期時・スピーチ直後）の3要因分散分析を行った結果，欲求群の主効果（ $F(3, 84)=4.74$, $p<.01$ ），スピーチ群の主効果（ $F(1, 84)=9.04$, $p<.01$ ），測定時期の主効果（ $F(2, 168)=91.48$, $p<.001$ ）がいずれも有意であった。1次の交互作用はスピーチ群×測定時期（ $F(2, 168)=5.26$, $p<.01$ ）が有意であったが，欲求群×測定時期（ $F(6, 168)=1.87$, $n.s.$ ）と欲求群×スピーチ群（ $F(3, 84)=0.43$, $n.s.$ ）は有意ではなかった。2次の交互作用は有意ではなかった（ $F(6, 168)=1.90$, $n.s.$ ）。

スピーチ群×測定時期の1次の交互作用について単純主効果の検定を行った結果，スピーチ予期時（ $F(1, 84)=9.01$, $p<.01$ ）とスピーチ直後（ $F(1, 84)=12.66$, $p<.01$ ）で聴衆有群のNAが聴衆無群よりも高かった。

また、聴衆有群 ($F(2, 83)=56.82, p<.001$) と聴衆無群 ($F(2, 83)=42.29, p<.001$) で測定時期の単純主効果が有意であったため、多重比較 (Bonferroni $p<.05$) を行った結果、聴衆有群ではスピーチ予期時 ($M=2.07, SD=0.11$)、スピーチ直後 ($M=1.26, SD=0.12$)、実験前 ($M=0.86, SD=0.11$) の順番でNAが高く、聴衆無群ではスピーチ予期時 ($M=1.56, SD=0.10$) のNAが実験前 ($M=0.79, SD=0.10$) とスピーチ直後 ($M=0.69, SD=0.11$) よりも高かった。

欲求群の主効果について多重比較 (Bonferroni $p<.05$) を行った結果、LH群 ($M=1.56, SD=0.14$) はHL群 ($M=1.02, SD=0.14$) とLL群 ($M=0.99, SD=0.10$) よりもNAが高かった。HH群 ($M=1.29, SD=0.09$) はいずれの群とも有意差がなかった。

考 察

本研究の目的は、実在の聴衆がいない場面でも話者がネガティブな感情を経験する要因として、話者本人の対人的欲求の影響を検討することであった。対人不安の先行研究をもとに、話者の要因として賞賛獲得欲求と拒否回避欲求に注目した。聴衆の有無を操作したうえで、それぞれの欲求の高低によってスピーチ課題時の否定的感情に違いがあるのかを比較した。

結果から、聴衆の有無に関わらずスピーチ予期時にNAが最も高まり、スピーチ後には低下する傾向を示した。スピーチを予期することで聴衆がいないと教示された場合でも否定的感情は高まることが確認できた。

聴衆の有無について、聴衆がいる場面でのスピーチは聴衆のいない場面でのスピーチよりもスピーチ予期時とスピーチ後の否定的感情が高かった。この結果は、Oda & Endo (2008) を支持するものであり、聴衆の有無という要因は話者の否定的感情の生起に大きな影響を与えることが改めて示された。

話者の対人的欲求について、本研究の仮説はいずれも支持されなかった。つまり、聴衆の有無や測定時期に関わらず、LH群のスピーチ場面の全体的な否定的感情はHL群とLL群よりも高いということが明らかになった。この傾向は対人不安と両欲求との関連を検討した佐々木他 (2001) と同様であった。本研究においてもSchlenker & Leary (1982) のモデルの限界が示されたと言える。対人的不安を高める要因として既に他者からの否定的評価への恐れがあることが指摘されている (石川他, 1992; Mansell et al., 1999; Winton et al., 1995)。対人不安と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連からスピーチ場面の否定的感情の生起を考察すると、他者から否定的な評価を受けたくないという拒否回避欲求が対人不安の程度を規定する大きな要因であり、そのためLH群の否定的感情が最も高かったと推測される。さらに、佐々木他 (2001) が述べたよ

うに、賞賛獲得欲求が拒否回避欲求と拮抗し、対人不安に及ぼす拒否回避欲求を弱める働きを持つため、それがスピーチ場面においても否定的感情を抑制するよう働いたと解釈できる。ただし、HH群とLH群のNAに有意な差がなかったことから、賞賛獲得欲求の抑制は否定的感情を十分に低下させるには至らないと考える。

結論として、スピーチ場面の否定的感情の程度には聴衆の有無が大きく影響しているということが示唆された。また、話者の拒否回避欲求がスピーチ場面での否定的感情の生起を促進し、拒否回避欲求が高い話者に限り賞賛獲得欲求が否定的感情の生起を弱く抑制することが示唆された。しかし、話者の対人的欲求は聴衆の有無および測定時期との関連が認められなかった。

先行研究で見られた傾向が本研究で認められなかった理由としては、他者の視線に対する意識を十分に操作できなかった可能性が考えられる。本研究の聴衆無群の実験参加者はビデオカメラに向かってスピーチを行ったが、録画したスピーチの様子を評価するなどの教示をしなかったため、特に聴衆無群に割り当てられた話者に対して、他者からの評価に対する意識の度合いを確認することはできなかった。手塚他 (2007) では、スピーチの様子をビデオカメラで撮影した後にフィードバックの脅威度を操作した結果、脅威度の度合いによって話者の生理心理的状态に違いが認められたことから、本研究においても他者からの評価に対する意識の程度をさらに厳密に操作したうえで検討を行うことが必要であると考えられる。さらに、その他の限界として実験参加者の男女の人数に偏りがあることや、各群のデータ数が少ないため本研究の結果をどこまで一般化できるかについては議論の余地があることが挙げられる。今後はさらにデータ数を増やし、本研究と同様の結果が得られるかについて検討を行うことが望まれる。

以上の限界は認められるが、本研究の結果は、これまで質問紙調査で得られていた対人不安と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連についての知見がスピーチという対人場面にも拡張できるという可能性を示せた点で意義があると考えられる。

引用文献

- 有光興記 (2001). 「あがり」のしろうと理論: 「あがり」喚起状況と原因帰属の関係. 社会心理学研究, 17, 1-11.
- Bosch, J. A., De Geus, E. J., Carroll, D., Goedhart, A. D., Anane, L. A., Zanten, J. J. V., Helmerhorst, E. J., & Edwards, K. M. (2009). A general enhancement of autonomic and cortisol responses during social evaluative threat. *Psychosomatic Medicine*,

- 71, 877-885.
- 石川利江・佐々木和義・福井 至 (1992). 社会的不安尺度FNE・SADSの日本語版標準化の試み 行動療法研究, **18**, 10-17.
- Jeger, A. M., & Goldfried, M. R. (1976). A comparison of situation tests of speech anxiety. *Behavior Therapy*, **7**, 252-255.
- 小泉晋一 (1997). スピーチ場面イメージの鮮明度イメージ能力とスピーチ不安が及ぼす効果 心理学研究, **68**, 203-208.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 (2006). 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35) の作成の試み パーソナリティ研究, **14**, 214-226.
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1997). *Social Anxiety*. NY: Guilford Press.
- Mansell, W., Clark, D. M., Ehlers, A., & Chen, Y. (1999). Social anxiety and attention away from emotional faces. *Cognition and Emotion*, **13**, 673-690.
- Mckinney, M. E., Gatchel, R. J., & Paulus, P. B. (1983). The effects of audience size on high and low speech-anxious subjects during an actual speaking task. *Basic and Applied Social Psychology*, **4**, 73-87.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246.
- Oda, Y., & Endo, K. (2008). The effect of an audience on cortisol response to a speech task. *International Journal of Psychology*, **43**, 508.
- Puigcerver, A., Martinez-Selva, J. M., Garcia-Sanchez, F. A., & Gomez-Amor, J. (1989). Individual differences in psychophysiological and subjective correlates of speech anxiety. *Journal of Psychophysiology*, **3**, 75-81.
- 笹川智子・猪口浩伸 (2012). 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が対人不安に及ぼす影響 目白大学心理学研究, **8**, 15-22.
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 (2001). 対人不安における自己呈示欲求について—賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から— 性格心理学研究, **9**, 142-143.
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 (2005). 羞恥心と心理的距離との逆U字的関係の成因に関する研究—対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ— 心理学研究, **76**, 445-452.
- Sawyer, C. R., & Behnke, R. R. (2002). Behavioral inhibition and the communication of public speaking state anxiety. *Western Journal of Communication*, **66**, 412-422.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-perception: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- 菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研究, **57**, 134-140.
- 菅原健介 (1998). シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究, **7**, 22-32.
- 手塚洋介・敦賀麻理子・村瀬裕子・鈴木直人 (2007). 認知的評価がネガティブ感情体験と心臓血管反応の持続に及ぼす影響 心理学研究, **78**, 42-50.
- 吉澤英里 (2013). 聴衆の存在と話者の拒否回避欲求がスピーチ予期時の生理心理的反応に及ぼす影響 社会心理学研究, **29**, 104-112.
- Winton, E. C., Clark, D. M., & Edelmann, R. J. (1995). Social anxiety, fear of negative evaluation and the detection of negative emotion in others. *Behaviour Research and Therapy*, **33**, 193-196.

(2013年7月11日受稿, 2014年1月29日受理)